



日本キリスト教団  
三軒茶屋教会

# 三軒茶屋 教会通り

〒154-0024  
東京都世田谷区三軒茶屋1-31-5  
TEL/FAX:(03)3418-4933  
編集/発行:広報部

第14号 2002年4月発行

## 「共生」の時代の生き方



牧師陣内厚生

「世界がもし一〇〇人の村だったら」という絵本が出版され評判を呼んでいます。昨年、インターネットで世界中を駆けめぐった一篇のエッセイで、題名どおり世界の全人口を一〇〇人と見立て、その小さな村の人々がどのような状態にあるのかを考えるものです。わかり易く、しかし驚きと、また感動を呼び起こす内容なのです。

この本は私たちに何を訴えているのでしょうか。人の住む限られた地球上で、私たちは「共生」を考えていかなければならないということがあります。人間同士の対立や抗争、民族や宗教間の憎悪や排斥が、いかに愚かしいことであるのかを知ることです。貧富の差が厳然として存在し、地球環境の破壊が確実に進行している状況は、まぎれもなくその責任が私たち人間の手にかかっていることは言うまでもありません。

聖書を開けば、イエスは「何を食べようか何を飲むか、…何を着ようか」と思い悩むな、「あなたがたのうちだれが思い悩んだからといっ

て、寿命をわずかでも延ばすことができようか」、「野の花がどのように育つのか、注意して見なさい」（マタイ六章）と言われます。イエスの自然観、人間観が窺えます。これらの言葉は、イエスの噂を聞いて集まった、「いろいろな病気や苦しみに悩む者、悪霊に取りつかれた者」など、言わば貧しい人びとや病んでいる人びと（同四の二四）に向けられました。その後日イエスは、五千人の群衆にパンと魚を分かち与え、「すべての人が食べて満腹した」（同四の二〇）とあります。イエスは見事に、この世の顧みられない人びとへの平等な分配の法則を表現されているではありませんか。

私たちは、日本のような豊かな社会において、食生活に困ったり、不治の病のために宗教を求めたりはしません。しかし、豊かさゆえに人間の真実が見えなくなっている、また自らの傲りを丸出しにした、疾病のごとき状態に陥ってはいないでしょうか。イエスは、利己主義に犯された現今の日本の姿を、そして私たち

の厚顔無恥を憂えておられるに違いありません。

私たちが現代の「共生」を考えるとき、先日、当教会にお招きした中村哲医師の存在は、私たちの心を揺さぶるものでした。十八年前から、パキスタンとアフガニスタンの辺境地で最貧層の人びとや戦争による難民らを対象に、ハンセン病対策や無料診療を続けてこられた活動には、ただ驚嘆するばかりありません。同氏が作られたベシヤワール会は、早魃と戦禍により救援の届かない所に行こうと、民衆の中に入っていく。拠点の病院と十ヶ所の診療所を設けた他、水資源確保のため六六〇ヶ所の井戸掘りに成功したと聞くに及び、これこそ求められる「共生」の業だと思えたのです。同氏の言葉によれば、自分がたまたま出会った人びとのために何か出来ることをしたにすぎないと。あの最強国の空爆とは全く対極にある、アフガンの土と人びとにこだわり続ける行動力は、私たちに、「共生」の時代の先駆として訴えてやまないのです。